

シンガポール日本人学校の教育と

多民族国家シンガポールの教育事情等について

北広島市立大曲小学校 佐々木 智秀

- ・派遣期間 2011年4月6日～2014年3月18日
- ・派遣国 シンガポール共和国
- ・派遣教育施設 シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校

1、はじめに

2014年3月17日月曜日、この日3年間勤めてきたシンガポール日本人学校クレメンティ校にて、3学期修了式及び離任式が行われた。3年前、文部科学省の派遣教員として苦楽を共に過ごしてきた同期の教員は6名。途中家庭の事情により、1年間の任期で帰国した仲間を入れると7名の仲間たちと、公私ともに充実した日々を過ごすことができた。離任式で私は、「シンガポールでのかけがえのない出会いを、一生の宝物に。そしてまた会える日を楽しみに・・・。」との言葉を残した。初めて訪れた異国の地で、さまざまな人々と心温まる交流ができたことや、教員という立場でさまざまな子どもたちの教育に携わることができたことに、感謝の気持ちとともに今後の大きな責任を感じている。

今回、私がシンガポールで経験してきた日本人学校の教育事情、また現地の教育や生活事情などを詳しく報告したい。

2、多民族国家シンガポール共和国の概要

① 概要

シンガポールはマレー半島の南、北緯1度17分、東経103度51分、赤道から137kmに位置する本島と周辺59島より構成されている。面積は685、4km²、淡路島または東京23区とほぼ同じ広さである。人口は約541万人、国土が狭い分人口密度は約6500人/km²と高い。気候は熱帯雨林気候に属し、年平均気温は27℃前後、季節の変化はほとんどないが、雨季と乾季がある。年間を通じて降水量が多く2000mmを超え、湿度は一年中高い。



多民族で構成されているシンガポールは、中国系75%、マレー系14%、インド系9%、

その他2%となっている。公用語は英語、中国語、マレー語、タミール語が使われており、テレビ放送や表示もそれぞれの言語で表されている。共通語としては英語が用いられている。シンガポールで話される英語は独特のアクセントをもっており、よくシングリッシュと言われている。これは現地の中国語、マレー語が混じっていて、発音が独特だったり、文法が違ったりしている。

② 歴史

かつてのシンガポールは「テマセク」と呼ばれていたが、周辺のスマトラ・マレーシア・ジャワなどの諸王朝の興亡に伴い、その都度支配下に置かれ影響を強く受けていた。14世紀末頃に「テマセク」が「シンガプーラ～獅子の町～」と呼ばれるようになった。16～18世紀には、西欧諸国による植民地化が始まり、1819年イギリス人スタンフォードラッフルズ卿がシンガポールに上陸、自由港宣言を発表して貿易港としての発展の基礎を築いた。その後シンガポールはイギリスの植民地となり、中継貿易地として繁栄した。その間、中国人やインド人、アラブ人、ヨーロッパ人など多民族が住む地となっていくた。第二次世界大戦中、シンガポールはイギリス軍と日本軍の激しい戦場となり、多くの犠牲者を出した。1942年イギリス軍が降伏し日本軍の占領地となってからは「昭南島」と改名されたが、1945年第二次世界大戦の終わりとともにシンガポールは再びイギリスの植民地となった。その後1957年イギリス連邦の一員として自治権を獲得し独立しマレーシア連邦に加入するが、1965年8月9日シンガポール共和国として分離独立を果たした。独立後は、外国企業の積極的誘致政策による工業化の推進や中継貿易港としての国際性を生かし、アジアにおける国際金融都市として発展を続けている。

③ 宗教

宗教は仏教、イスラム教、ヒンズー教、キリスト教など多様な宗教宗派が共存している。市内にはそれぞれの寺院やモスク、教会等が多く見られる。そのため、日常生活の中で異民族・異教徒同士が相手の生活様式や考え方を相互に理解・尊重しながら生活している様子がよく見られる。学校内にも、イスラム教やヒンズー教などさまざまな宗教の職員がおり、互いの信条や考えを尊重して仕事をしている雰囲気が、とても好感が持てる光景だった。



- 中国系社会：面子を重んじ、敬老・謙虚を美德とする。
- マレー系社会：イスラム教の価値観が根強く、酒、豚肉料理は禁忌。
- インド系社会：宗教・風俗共に多種多様で牛肉は禁忌。

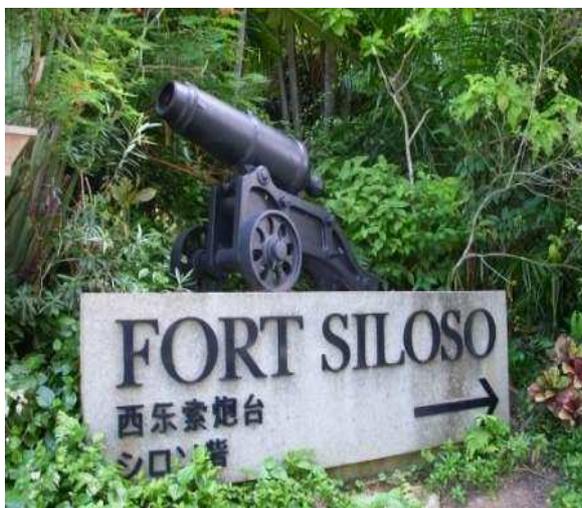
④ 熱帯雨林気候の植物の特徴とボタニックガーデン

代表的な樹木がレインツリー。樹皮がごつごつしていて着生植物が付きやすく、バースネストファーンなどのシダや着生ランなどをたくさんつける。

ボタニックガーデンは、今から約150年前イギリスの植民地政策の一環として作られる。東京ドーム11個分と言われる、52haもの敷地にたくさんの熱帯植物、花、実など数千種もの植物が街の中心地に広がっている。ボタニックガーデンには、ジンジャーガーデン、オーキッドガーデン、レインフォレストなど多くのセクションがあり、市民だけではなく観光客が多く集う憩いの場所となっている。

⑤ 日本との戦争の歴史（第二次世界大戦・太平洋戦争）

この頃、戦争を続けてきた日本は慢性的に資源が不足していた。マレーシアやシンガポ



ールにはゴムややし油、パイナップル、すずなど資源がたくさんあった。日本はイギリス軍が支配している東南アジアの島を占領することで、戦争に優位になれると考えていた。日本にとっては日本やアジアが生き残るための「正しい戦争（大東亜共和国、アジアは一つ!）」だと国民全体に指示してきた。だが、シンガポールにとって日本からの支配は歓迎できない。一時シンガポールにいたお金持ちの人がレジスタンスを結成し抵抗を続けた。蒋介石率いる中国軍やオーストラリアを経由したイギリス軍の支援を受けて、日本軍対

するゲリラ活動を行っていた多数の中国系住民（華僑）が摘発された。そして、1942年2月15日、イギリス軍が東南アジアの拠点としていたシンガポールを無条件降伏で日本に引き渡す。昭和17年2月20日の新聞がシンガポールを占領したことを伝えている。その時、イギリス軍（パーシバル中将）と日本軍（山下泰文司令官）会談を行ったのがオールドフォード工場である。この会談は、通訳がうまくいかず山下が「You tell me, Yes or No?」と迫ったことから「YesNo会談」として知られている。山下司令官は2月15日までにこの戦いでなくなった日本人、シンガポール人、イギリス軍などすべての戦死者のためにメモリアルをブキバト地区に作らせた。日本敗戦後、戦争の責任を問う東京裁判が行われた。A級戦犯は東京で、B級とC級戦犯はチャンギの裁判所で行われ、135名が死刑判決となった。山下司令官の裁判には、パーシバル中将も傍聴者として呼ばれた。1967年9月21日、シンガポール経済発展の為、29億4千万3千円の無償供与と戦争の責任はこの協定をもって、今後追及しないという協定が結ばれた。※終戦直後は日本人はシンガポールに入国できなかった。

戦時中、日本の占領下にあったシンガポールでは、多くの中国系住民がスパイ容疑で逮捕され、処刑されるなどした。そのことは今でも小中学校で歴史的事実として教えてい

る。高校レベルからは当時の世界情勢を教える中で、なぜ日本が戦争へと進んだのかを学ぶ。そして、もし自分がその時の日本の首相だったらどうするかを尋ね、いかにすれば戦争を避け、さらに国を守るにはどうすべきかを考えさせる教育を行っている。そこには厳しい対日批判はない。背景には、多くの日本企業が進出し始めた時期と重なることから、日本との関係改善をはかることで経済発展につなげる狙いがあったとみられるが、実際に反日教育をやめたことが、今の日本とシンガポールとの政治経済だけでなく社会的にも良好なつながりを作る基礎になったのは間違いないだろう。

3、シンガポール日本人学校の教育について

① シンガポール日本人学校の沿革

シンガポールに初めて日本人のための学校ができたのは1912年。今から90年ほど前のことだったが、1941年には第二次世界大戦のために閉校を余儀なくされた。1964年には、国語と算数の補習授業が始まり、同時に全日制日本人学校設置のための活動が活発になった。

そして1966年、教員3名、児童数27名で開校。この時にシンガポール政府より、私立学校として正式に認可された。このころは勉強道具もまだまだ足りず、先生やPTAが協力しながら工面していたようだ。現在のクレメンティ校の前身である校舎は、シンガポール日本人会を中心にして多くの企業の方、日本政府の援助で素晴らしい校舎が完成した。体育館・プール・運動場・放送室ができ、1984年4月には小中学部の校舎を分離し、ウエストコーストに中学部校舎が新築・移転した。



平成7年度（1995年度）には、小学部は児童数増加のためチャンギ校舎を新築し、小学5・6年生はチャンギキャンパスに移り、日本人学校は、三校体制になった。平成10年度（1998年）には、小学部において学区制を敷いた完全二校体制になった。また、2002年を見越した学校5日制も国内並に導入された。

② シンガポール日本人学校クレメンティ校の教育の概要

ここからは、私が勤務していたクレメンティ校の教育について紹介したい。

私が派遣された2011年度のスタート時点で児童数は650名程度であったが、3年後の2013年度終了時には720名ほどと徐々に児童数が増加しているのがわかる。現在の児童数を聞くと750名ほどで、まだまだ増加の一途をたどっている。そのほとんどが企業の駐在員、研究員、技術者が1～2年ほどの期間を過ごすため、家族とともに来星

している。そのため、子どもはいずれ日本や他国の日本人学校に転校していくことが多い。

この要因として考えられるのは、シンガポールの経済成長やさまざまな優遇制度による日本企業進出の増加が挙げられる。また観光にも力を入れており、外国人観光客が10年前から1.5倍以上増加して、1200万人を超えていることも少なからず影響している。

そのような中で、教員数は40名程度、現地専任のスタッフが30名程度と、教員数では日本と変わらない水準で進められている。ただ、教員の内訳を見てみると、文科省派遣の教員は私がいた2013年度で16名程度である。残りは、海外子女教育財団から派遣されている教員とシンガポール日本人学校独自で採用している現地採用の教員で賄っているのが現状だ。この財団派遣と現地採用の教員は経験年数がさまざま、日本で教員を目指す人や、海外での仕事にあこがれてきた人など多種多様な人たちが教員として勤務している。

新学期のスタートは4月中旬。日本よりも少し遅めである。学期の初めには40～50名程度の編入児童（転入児童）が入ってくる。なお、学期の終わりには逆に30～40名程度の退学児童（転出児童）がおり、毎学期学級平均3～4名の入れ替わりがあることになる。

③ クレメンティ校の特色

クレメンティ校の大きな特色の一つとして、英語教育の充実が挙げられる。前述した現地専任のスタッフ30名程度は、ほとんどがシンガポール在住の英会話スタッフや、イマージョン教育（その言語環境に浸って行われる教科）の専門スタッフである。

英会話の授業は週3回のペースで進められ、レベルごとに12クラスほどに分かれている。各クラス10名前後の少人数で進められるため、きめ細かな英会話の指導が可能となっている。シンガポールに来たばかりの子どもでも、3か月ほどすると日常会話が少しできる程度の英会話力を身につけることができている。英検受験も積極的に取り組んでおり、2級・準1級を取得できる児童もいる。



また、イマージョン教育では、音楽と体育の中の水泳の授業に取り入れられている。音楽は低学年を中心に週1回程度のペースで、基本的にすべて英語の授業が進められている。歌も英語の歌やマレー語の歌など、自然と国際理解教育につながっている。

水泳の授業は週1回ペースで年間通して行われ、現地のスイミングスクールのインストラクターと専属契約して、これもほぼ英語で授業が進められている。担任はプールサイドで見守りながらサポートをしている。週1回というペースと、シンガポールの住宅には、ほとんどプールがついているところばかりという、いつも水泳の出来る環境が整っているため、技術習得のレベルがとても高い。2年生の段階でクロール、平泳ぎ、背泳ぎまで教え、25m以上泳げる児童が大半となる。

6年生になると、チャンギ校との記録会もありモチベーションは高い。ちなみに、水泳記録会の進行も全て子どもたちがオールイングリッシュで進めていくこととなる。

また英会話スタッフが多数在籍している利点を生かして、外国語活動にも力を入れている。私が赴任した2011年度は校内研究の取り組みで外国語活動が行われており、3年目のまとめの時期であった。そのため、英会話スタッフと連携を図りながら、担任主導で進められる授業の形を研究することが出来た。英会話スタッフが多いため、学年4学級に各3名のALTを配置するという、贅沢な授業ができる環境であった。担任がT1として授業を進めていくのが基本ではあるが、シンガポールならではの文化や習慣を学ぶ学習や、中華系やインド系、イスラム系の英会話スタッフの力を借りて、さまざまな文化を学ぶ外国語活動を実施することができた。学んできたことを今後少しずつ還元していければと思う。



4、シンガポールの教育事情

① シンガポールの教育システム

シンガポールでは、初等教育6年間（Primary School）、中等教育4年間（Secondary School）が基本的なシステムである。そのシステムの中で特筆すべき点は、「競争」である。初等教育4年の段階で、その後のクラスを決める試験が行われ、大きく3コースに分かれる。そして、6年終了後、中等教育に進むための全国一斉の試験が実施され、そこで進む学校が決まっていく。普通コースや特進コースといった能力別にきっぱりと分けられていく。そのため小学3年の段階で、ある程度の能力差が判断されていくことになる。

その後、男子は2年間の兵役が義務付けられ、大学進学へと進む。シンガポールにある主要の国立大学は、NUS・NTU・SMUがある。海外へと留学していく学生も多い。

② 現地校との交流を通して感じたこと

シンガポール日本人学校では、年間を通して現地の小学校数校と交流をもち、お互いの学校を訪問したり、こちらの学校に招待したりしている。その際、体育館や教室で一緒に授業や行事を行っている。現地の小学校では、基本的に英語で授業が行われている。英語の習得が不十分な児童に関しては、個別の授業も行われている。児童同士の交流では、英語でのコミュニケーションが図れるように、日ごろの英会話



授業や外国語活動で学習を進めている。

現地校と日本人学校の交流を通して強く感じたことは、日本人の規律性や集団行動の意識の高さは本当に素晴らしいものだという事だ。現地校がすべてだとは思わないが、何か一つ全体で行動して集合する場面などでは、顕著に差が現れていた。これは日本人として誇るべきものだと感じた。現地校の先生方も、日本人の素晴らしいところを言ってくれてうれしく思った。しかし、自分の意見をはっきり言う力やコミュニケーションの能力、語学力などに関しては現地校との大きな差を感じざるを得なかった。日本人の特質を生かしながらも、このような能力を向上していくための方策、手立てを考えていく必要があると感じた。

5、シンガポールの生活事情

① 住宅事情

シンガポールの住宅は大きく3つの分類に分かれる。1つはHDB、いわゆる公営の団地である。各地に数多く建設されており、シンガポール人の約85パーセントが入居している。2つ目はコンドミニアムやサービスアパートメントといった、民間のマンションである。セキュリティやプール、ジムなどのアメニティが充実しており、部屋にはソファ、ベッド、テレビなどの居住に必要な家具、家電はある程度そろえられている。3つ目は1戸建てで、富裕層や永住権を持つ欧米人などが好んで居住する。

我々日本人が多く居住するのはコンドミニアムである。入居のしやすさや各地にくまなくあること、2年ごとの契約更新といった面で人気は高い。日本人学校の先生方は、もれなくコンドミニアムに入居することになる。

② 交通事情



シンガポールは狭い土地の中で500万以上の人が生活しているため、交通渋滞が大きな問題となっている。そのため車を所有するためのハードルが高い。まず車を持つためのライセンスが必要となる。所有のために10年ライセンスで800万円という高額を払わなければならない。そして車両そのものも高い。理由は高額の関税がかけられているからである。車種によっては3~4倍の金額となっている。

もう一つの理由はERPシステムである。これは、都心へ進入する車両に一定の料金を自動的に掛ける制度で、そのための機械を装備することが必須である。これにも多額な金額が掛かることになる。

そのため、シンガポールでは公共交通機関が非常に

発達している。バス路線は国中を網羅して、ほぼ5～10分間隔でバスが来る。バス停の間隔も近く、生活するには便利である。わたしも学校へはバスを使用して通勤していた。

また、MRTと呼ばれる地下鉄も発達している。都心部だけでなく空港などにも伸びており、今も拡張が続いている。私が帰国する少し前には、マリーナベイサンズに直通する路線がオープンし大変便利になった。

③ 生活事情

シンガポールの物価は基本的に高い。特にお酒類は高い。しかし、物の種類は豊富で日本の物も結構手に入りやすい。日系のスーパーやデパートも多く、生活はとてもしやすいと感じた。日本料理のお店も数多くあり、人気店が進出している。

日常の生活では、地元のスーパーやウェットマーケットで十分事が足りる。野菜や果物は東南アジアならではのものも多く、色々な料理を楽しむことが出来る。とくにおいしかったのはマンゴーである。

また、身近な場所にホーカーといわれる屋台村のような食事街があり、手ごろな値段でおいしい食事を楽しむことが出来る。シンガポールの料理で人気なのは、チキンライス、バクテー、ナシゴレンなどである。

6、まとめ

以上、3年間のシンガポール生活で経験してきたことのほんの一部ではあるが、今回報告させていただいた。

私が3年間で出会った人々、子どもたちとの交流は今も続いている。これからも一生の宝物として続いていくことだろう。また、北海道の代表として派遣された責任と自覚を常に持ちながら、学んできた多くのことを還元していけるよう努力していきたい。